

まちひとしごと

Vol. 54

北海道新聞社倶知安支局

かとう みちか
加藤 遥花 さん

人との出会いを大切に 心が動くような記事を作りたい



新

聞記者として管内7町村を飛び回り、地域の声を届け続けている加藤遥花さん。

名寄に生まれ、幼少期、学生時代を苫小牧で過ごした。高校時代に興味のあった心理学を学びたいと札幌の大学に進学し、大学院まで研究を続けた。

幼い頃から文章を書くことが好きだったという加藤さん。その一番のきっかけは小学生のときに取り組んだ壁新聞だった。

「小学3年生のときに1年間、編集リーダーを務め、中心となって、レイアウトや記事の作成に携わりました。それが楽しくて、ずっ

と心に残っていました」

大学院を卒業し、なりたかった記者の道へ。長年の夢が叶った瞬間だった。入社後配属された函館支局では、水産、教育、遺跡や歴史に関することなど、さまざまな分野を担当した。

そして、記者となり4年目の今年、倶知安支局に配属となった。

「この地域には、子どもの頃に家族でよく訪れていて、大自然の中で乗馬や虫捕りを楽しんだ記憶があります。時が経って思い出の場所に帰って来られたことがとても感慨深いです」

倶知安支局に赴任して数カ月、豊かな自然や人のあたたかさに触れ、ここに来てよかったと話す加藤さん。変化の著しい地域だが、新しいものと昔から変わらないものが入り混じる環境を、この地域ならではの良さだと感じている。

「新しいものだけではなく、古いものにも目を向けていきたいと思っています。その地域にずっとあるものや、思いを貫いて同じ活動を続けている人など、自分にか見つけられないものを拾い上げ、伝えていきたいです」

新聞記者という仕事の魅力を、さまざまな人との出会いを通じて

自分の世界を広げられることと話す。取材では、船に乗って漁に同行したり、農家の方と一緒に収穫をしたりすることもあったという。

「実際に体験をして、記事に載らないような相手の思いや背景を少しでも理解したいと思っています。取材した内容のうち、記事となるのがそのうちのわずかだとしても、時間をかけて丁寧に話を聞くことを大切にしたいです」

デジタル化が進む現代、情報を伝える媒体も多種多様になっているが、長く人々の生活に根付いている新聞には、いつまでも形に残るというアナログならではの良さがある。実際に、過去に取材した人やお店がその記事を切り抜き、大切に飾ってくれることがあるという。

「新聞というものを通じて誰かの大切な瞬間を記録してあげられること、そのお手伝いができることがとても嬉しいです。相手の気持ちに寄り添い、読んだ人の心を動かせるような記事を作れる、そんな記者でありたいです」

※まちひとしごとは不定期連載です